

地引網・きんちゃく

地引網とは？

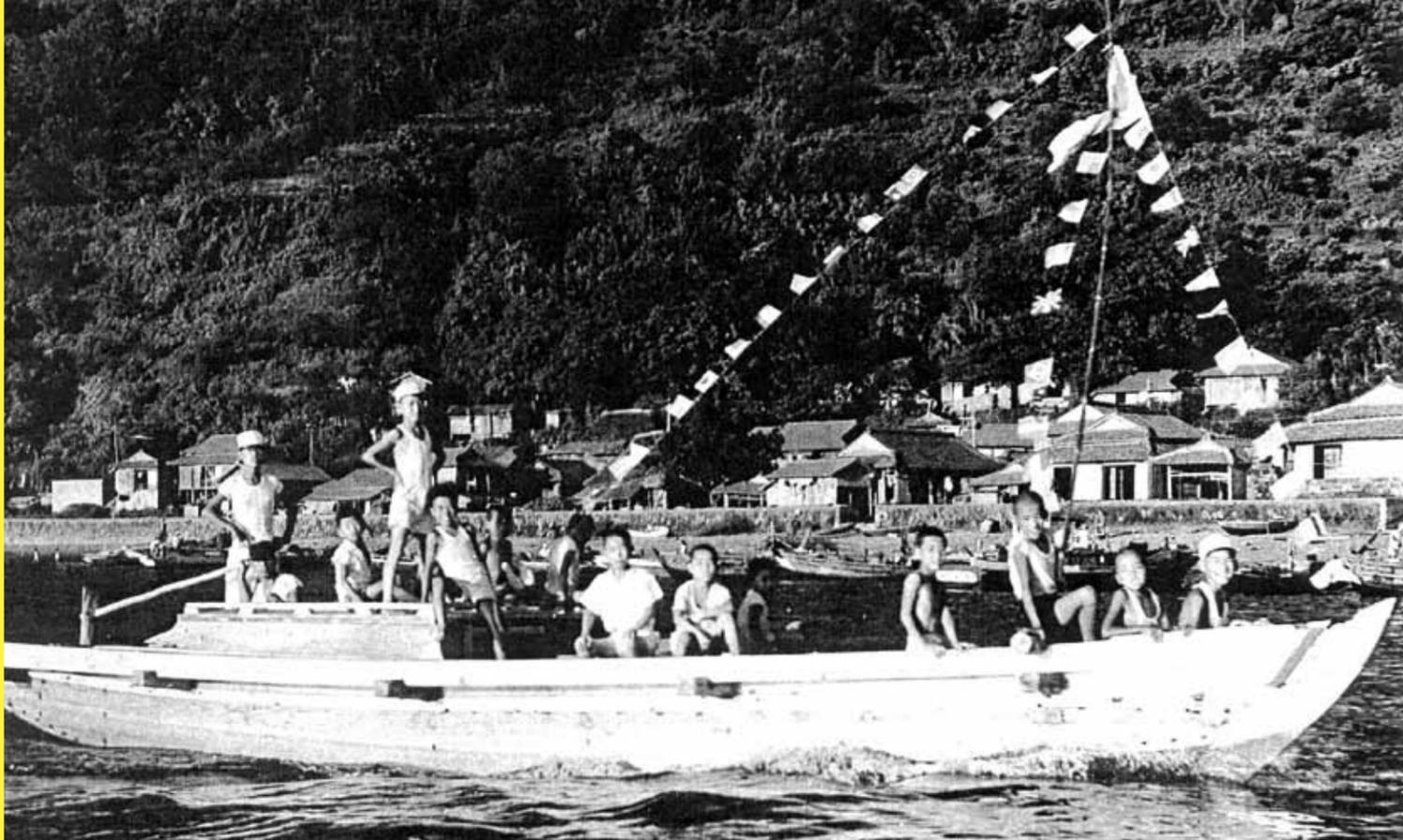
■概要
灯舟と網舟（魚を取り囲むように網を打つ船）が、網を海辺から引き寄せて魚を取る漁法です。

■場所
場所は抽選で取り決め、境の海岸の3か所ほどで行われていました。これは現在の川下の浜、中村、田村の浜になります。

■まっどっ
網を引き寄せる作業には、「まっどっ」と呼ばれるロープを巻き取る大きな木の道具を使い、4～5人で柄の棒を押しながら回りました。また朝方3時頃になると「かせをせー」と呼びかける声が浜中に響き渡りました。

きんちゃくとは？

■概要
きんちゃくは、いわゆる「まき網」のことです。大体の船団が①火舟、②ひらかた、③網舟、④焼玉船で構成され、火舟2隻（網元の親方と息子など）、ひらかた2隻（2、3人）、網舟1隻（5、6人）で、6隻の舟と最低15人ほどの人手が必要でした。



2 漁業のまち

海に生き、漁を生業としてきたまち

昭和30年頃

昭和30年頃の生活は、早いうちに夕飯をとって、大勢の家族に見送られ沖へ漁に出て、翌朝に「カタクチイワシ」の入った「竹かごのいけす」を引いた本船が見えると喜ばれていたと伝えられています。

牛根境の漁業は「一本釣り」、「地引網（ごこあん）」、「きんちゃく（八

田網・引っきゃん・まき網）」の大きく3つに分けられます。

漁場は、湾内はもちろん、魚のなときは古江、海潟、喜入など、遠くへ出かけて行ったそうです。一度外へ出ると、当時は20日位は帰れず、船員はそれぞれ着替えや薪、水や生活に必要な物資を積み込んで出漁していきました。

漁の報酬は、「あんの親方」と呼

ばれる「網元」の元に集まり、ソバを食べ、焼酎を飲みながら、分け前をもらう「計算」と呼ばれる風習があったそうです。

昔は、祝いごとにソバを食べる風習があり、月1回の給与はお祝いごとに当たることと、労働者に対しての1か月のねぎらいの気持ちもあつたのかもしれない。そのためか、この日は酔っ払う人たちが多かったそうです。

月夜の晩は漁が休みで、海が時化している時は、漁に出ることは難しいため、網などの繕いや、舟の整備が行われていました。また、竹かごいけすに獲ったカタクチイワシは遠用カツ才釣り船の業者に売っていました。

昭和30年代の転換期

昭和30年代に入ると、高度経済成長の時代が到来し、若者が出稼ぎに行ったり、終戦直後ほど魚が獲れなくなりました。

当時の同組合長の中村万太郎氏は、昭和32年に香川県引田漁業協同組合のハマチ（ブリ）養殖現場を視察しました。その際、大きく成長した高価なブリに驚き、視察の翌年の昭和33年には、県内初のハマチ養殖が始まりました。

観光漁業からのスタート

養殖当初は、桜島口の入り江を仕切って放流し、餌付けして観光客に釣ってもらうという「観光漁業」の形で行われました。日本の高度経済成長による好景気の追い風と、鹿児島特有の冬場でも下がらない水温の利点により、大きなハマチやブリを他県に先駆けて出荷し、文字通り、日本一の漁協となりました。